

■対談 根本 かつる 国連広報センター所長／芝井 敬司 学長
SDGs(持続可能な開発目標)は世界の共通言語
達成に向けた取り組みが、人々をつなぐ

■リーダーズ・ナウ ー7

在学生— 法学部 4年次生 黒川 圭介 さん
文学部 2年次生 中村 真里絵 さん
文学部 1年次生 松岡 清乃 さん
卒業生— 日産自動車株式会社 総合研究所
EVシステム研究所 主任研究員
加藤 崇 さん

■研究最前線

日伯合弁製鉄所の「技術移転」成功の鍵を探る
日本とブラジルの文化を共存・調和させた「日系社員」—11

商学部— 長谷川 伸 准教授

水素エネルギー社会の実現に向けて

水素貯蔵材料の開発 —13

化学生命工学部— 近藤 亮太 准教授

■トピックス [学内情報] —15

関西大学×大阪体育大学による合同シンポジウム

「大学スポーツとオリンピック・パラリンピックの精神」を開催 ほか

■社会貢献・連携事業 —17

J:COMと社会連携番組を共同制作

学生による「関大生の明るいニュース」の配信開始 ほか

■関大ニュース —19

体育会野球部が秋季リーグ戦で優勝

明治神宮野球大会でも健闘の準優勝！ ほか

KANSAI
UNIVERSITY
NEWSLETTER



・SDGs(持続可能な開発目標)は世界の共通言語

達成に向けた取り組みが、 人々をつなぐ

根本 かおる ・国連広報センター 所長 × 芝井 敬司 ・学長

2015年9月、国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の中で掲げられたのが、持続可能な開発目標(SDGs: Sustainable Development Goals)だ。

SDGsは17のゴールと169のターゲットから構成される世界目標で、途上国と先進国とが共に、「地球上の誰一人取り残さない」ことを目指し、日本も積極的に取り組んでいる。

関西大学でも「SDGs推進プロジェクト」を設置し、SDGs達成に向け、分野横断的で多彩な活動を推進している。

今回は、自らSDGs推進プロジェクトの座長を務める芝井敬司学長が、SDGsの積極的な取り組みを呼び掛ける国連広報センターの根本かおる所長にお話を伺った。

◆国連への関心と理解を広めるために

芝井 はじめに国連広報センターのお仕事についてご紹介いただけますか。

根本 日本が国連に加盟したのが1956年。その2年後には日本に国連広報センターが開設されました。

その業務を2、3ご紹介します。日本語は国連の公用語ではありませんので、国連の活動や議論されている課題の中から、日本の方々にぜひお知らせしたい、あるいは多くの方が関心を寄せると予想されるコンテンツを、私たちが目利きとなって選び出し、日本語に翻訳して発信しています。

また、日本国内にはUNEP-IETC(国連環境計画国際環境技術センター、大阪市)、WHO健康開発総合研究センター(神戸市)、UNWTO(国連世界観光機関駐日事務所、奈良市)など、29もの国連諸機関の事務所があります。国連と国連諸機関と一緒に「一つの国連」として情報発信していく際には、日本では私どものセンターがその調整役を担っています。

それから、事務総長など国連の高官が訪日した時の受け入れも、私たちが全面的に対応します。国連広報センターは日本における国連の大使館のような役割を果たしているとご理解いただければ

良いかもしれません。

芝井 国連の広報活動にまつわる個人的な記憶ですが、私が小学校高学年の時、アフリカ・ビアフラで病気、虐殺、飢餓によって150万人以上の人たちが亡くなっていることを、ユニセフのキャンペーンを通じて知りました。日々の学校生活や友人関係の中では見えないもの、実際に世界で起きているニュースを示してもらったという強い印象が残っています。

ところで、根本さんは子ども時代をドイツで過ごされたとか。根本 ドイツが東西に分かれていた70年代に、西ドイツのハンブルクで4年近く過ごしました。その当時のベルリンにも行きました。学校には、東ドイツに住む親戚に会えないという同級生もいて、政治が人々の暮らしに土足で上がり込み、無茶苦茶に感じた。そのようなことに実際に触れたことが、のちに国際的なものに目を向けるきっかけになったのではないかと思います。

大学は法学部に進み、国際法を学びました。卒業後はテレビ局に入社しましたが、男女雇用機会均等法施行の前年で、女性には限られた職種での採用しかありませんでした。自分自身を振り返ってみると、これまでの体験がすべてSDGsにつながっているように感じます。SDGsの中で、私が特に大切にしているのは「誰一人取り残さない」ということです。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



根本 かおる (ねもと かおる)
国連広報センター(東京)所長。1963年神戸市生まれ。東京大学法学部卒。テレビ朝日を経て、コロンビア大学大学院で国際関係論修士号を取得。96年から2011年まで国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)にて、アジア・アフリカ等で難民支援に従事したほか、ジュネーブ本部では政策立案等も担当。WFP国連世界食糧計画広報官、UNHCR協会事務局長も歴任。13年8月より現職。著書に「難民鎖国ニッポンのゆくえー日本で生きる難民を支える人々の姿を追ってー」(ポプラ新書)など。

◆身近なところからSDGsを

芝井 私が学長に就任し、初めて迎えた卒業式で、ノーベル平和賞受賞者のマララ・ユサフザイさんの話をしました。マララさんは、特に教育の問題を重視されていますので、彼女の言葉を引用しながら「君たちは今まで順調にきたかもしれないが、世界規模で見ると教育に関してさまざまな問題がある。ぜひそういうことに目を見開いてほしい」と伝えました。2018年の卒業式では、グラミン銀行創始者のムハンマド・ユヌスさんの話をしました。貧困層を対象に金融サービスを提供するグラミン銀行の試みを説明し、どうして彼は大学の経済学の教授を辞めてそういうことを始めたかを中心に話しました。

これからも世界に目を開き、そこにある課題に対して、自分はどうするのかを自問してほしいと学生たちに伝えていきたい。そこで、この春の入学式ではSDGsについて言及しました。

本学は環境問題については、比較的しっかりと対応してきたと思います。その取り組みや成果は、大学の環境報告としてまとめています。例えば、学内の答案用紙などからトイレットペーパーに再生したり、大学生協と共にリサイクルにも取り組んだりして

SDGsは世界の共通言語だと思うんです。課題に取り組む世界中の人たちがつながり、自分の経験や学びを共有できる最適なプラットフォームだと思っています。

います。しかし、環境問題に対する行動はできていても、SDGsを意識しながら、現状を総合的に見直すところまではできていなかったと考えます。SDGsの目指すものは、そのまま指標や目標として現状の検証に役立つと思いますね。

根本 そういう活用方法は良いですね。

芝井 しかし、SDGsにはいろいろな分野の目標があるので、何を、どうしたら良いのか少し難しく感じる人もいます。そのような人に対して、私は「個人ですべてをやろうと思うのはあまり意味がない。まず、自分の身近なところで1つしてみる。そして、また1つしてみる。そういう形で始めればよい」と話しています。

ただし、組織としてはスピード感と鋭さがないとダメです。例えば、ジェンダー平等の問題は、時にはシステムをガラッと変えなければ、不平等を温存したり助長したりすることもあります。解決のために即断を求められることもあります。

根本 日本社会では、女性をステレオタイプに押し込めようとしてしまう傾向があるように思います。大学について言えば、例えば、女性教員の登用・活用のさらなる推進も必要だと思います。前述のマララさんがあれほど共感されたのは、テロに屈せず、女の子だって勉強したいっていうことを、勇敢に訴え続けたところにあります。政治家たちに気候行動のリーダーシップを求める座り込みをたった一人で始めたグレタ・トゥーンベリさんもしかり。自由闊達な議論の場である大学だからこそ、偏見やステレオタイプを変えていくことができるのではないかと思います。

今後、SDGsに積極的に取り組んでいかないう組織は選べなくなると思います。現代の若者たちはサステナビリティやフェアネスに敏感です。彼らの目にかなうような商品、サービス、教育を提供できないところはどんどん取り残され、社会的評価も得られなくなるでしょう。同時に世の中は大胆な改革に取り組む組織を積極的に応援する、そういう意識や目利き力を磨いていくことも必要だと思います。

◆少しの関心から、つながり、広がる

芝井 「プラスチック製ストローをやめても、プラスチックごみの総量にほとんど影響がないのに、あんなに宣伝する意味はありますか?」と、SDGsに対して少し斜に構えるような意見を持つ学生がいました。そこで、私は「些細なことでも、多くの人がプラスチックごみの問題に目を向けるきっかけになれば、そこから問題全体の解決につながっていく。だから、入り口は何でもいい」と返答したのですが、その学生は腑に落ちない様子でした。

根本 それは学長のおっしゃる通りですね。最近のプラスチックごみの問題は、ストローから火が付き、見る見るうちにレジ袋、海洋プラスチックごみ、そこからプラスチック全般の話にまで広がりました。メディアの役割も大きいでしょうが、その流れは一気に市民、企業まで広がりました。国連機関も動きましたし、あれは良い方向に社会が動いた好例かなと思っています。

芝井 日常生活で小さな不満や不具合に気付くことがあります。しかし、それらをその背後にある課題には結び付けにくい。そこをどのようにつなげていくか。きっかけは小さくてもいいので、その奥にある大きな課題に関心の目を向けてほしいと思います。

根本 小さな不満、気付き、違和感などはおのずと気になって調べますし、新しい知識に触れるとワクワクしますね。そのようなことを通じて、複眼的、統合的な思考力というものも養われると思うんです。

◆ニュースでは見えてこないSDGs達成への潮流

芝井 アメリカはパリ協定から離脱することを決定しました。また、先進国はこれから発展しようとしている途上国の発展を妨げるのかという声もあります。環境問題への取り組みについて、そのような対立や批判は潜在的にずっとありました。これから、SDGsは利害がぶつかり合う問題と対峙して、その真価を問われる時が来るかもしれません。

根本 SDGsやパリ協定について言えば、2020年は節目の年として記憶されることになると思います。

アメリカのパリ協定脱退が効力を持つのが2020年11月4日です。しかし、アメリカ国内では、政府以外で温室効果ガス削減に熱心に取り組む動きもあります。例えば、パリ協定には途上国の温室効果ガス削減を支援するための「緑の気候基金」というものがあり、先進国は積極的に資金を拠出していくことを決めています。日本は前回と同じく、約1,700億円拠出することになっていますが、アメリカ政府はゼロです。しかし、カリフォルニアなどの州政府や企業がそれを補うほどの資金を拠出しようと積極的に活動しています。今年9月には、世界の130以上のメガバンクによって責任銀行原則が発足しました。

芝井 ニュースや新聞では、政府や政治家の動向や言動にどうしても目が行きがちですけど、それだけでは見えてこない、SDGs達成につながる大きな潮流が形成されつつあるわけですね。

◆若者は、未来ではなく、今日のリーダー

根本 SDGsは世界の共通言語だと思うんです。課題に取り組む世界中の人たちがつながり、自分の経験や学びを共有できる最適なプラットフォームだと思っています。これは、国連事務総長がよく言うことですが、「若者は未来のリーダーではない。今日のリーダーだ」と。「マララさんやグレタさんのような若者が大人に発破をかけ、世界をリードしているじゃないか。未来のリーダーという見方はもうやめよう」と。今日のリーダーである若者を勇気付け、背中を押し、SDGsの取り組みを通して世界から学ぶ、世界と共有する。そのような教育を大学にはお願いしたいと思います。

2020年、国連は設立75周年を迎えます。その節目に私たちは世界中で“shaping our future together”というテーマを掲げ、設立100周年を迎える2045年がどんな社会であってほしいか、その実現に向けて順調に進んでいるか、そうでないのであればどこに問題があるのか、一人ひとりには何ができるのか、そういう対話を世界のあらゆる場所、あらゆるレベルで、特に若者とともに展開していこうと思っています。もちろん、その議論のベースはSDGsになると思います。関西大学の学生の皆さんにも、このような世界規模での意見交換の場に積極的に参加してもらいたいと思います。

芝井 すごく大切なお話ですね。若者は未来ではなく、今日の

日常生活で小さな不満や不具合に気付くことがあります。きっかけは小さくてもいいので、その奥にある大きな課題に関心の目を向けてほしいと思います。



芝井 敬司 (しばい けいじ)
関西大学学長。1956年大阪市生まれ。78年京都大学文学部史学科(西洋史)卒業。81年京都大学大学院文学研究科博士課程後期課程中途退学。84年関西大学に着任し、専任講師、助教授を経て、94年文学部教授。文学部長、副学長を歴任し、2016年10月より現職。日本私立大学連盟常務理事、大学コンソーシアム大阪理事長も務める。主な共著に「新しい史学概論」「EUと日本学ー「あかねさす」国際交流ー」など。

リーダーであるというのは興味深い視点ですね。だからこそ、大学あるいは社会全体が若者をチアアップすることをしっかりと考えなければならないと感じました。

SDGs達成に向けて、一大学だけでできることには限界があります。大阪には府内の41大学からなる「大学コンソーシアム大阪」という組織があり、私はその理事長を務めております。そこでも、SDGsに沿った活動を推進していきたいと思っています。

大阪は2019年にG20やラグビーワールドカップが開催されました。来年は東京オリンピック・パラリンピック、2021年には大阪を中心にワールドマスターズゲームズが開催されます。世界的なイベントを間近に見たり、ボランティアなどで支援したりすることができる機会がしばらく続きます。そして、2025年には大阪・関西万博。今回の万博は明確にSDGsをベースに据えたものになると思います。それに向かって、関西大学もまた総合的、横断的に地域を盛り上げる力になっていきたいと考えています。

根本 関西大学は大阪の私立大学の代表格ですね。そして、大学コンソーシアム大阪でも大切な役割を担われていると。私立大学らしいフットワークの良さで、必ずSDGsを推進するパートナーとなっていたらと期待しております。



1. SDGsに関する関西大学の行動指針

関西大学は、人間、地球、豊かさのことを考え、国際社会の協働的パートナーシップの下、自由で平和な世界を実現できる「考動力」と「革新力」を兼ね備えた人材を育成し、SDGsに資する研究や社会貢献を展開していきます。

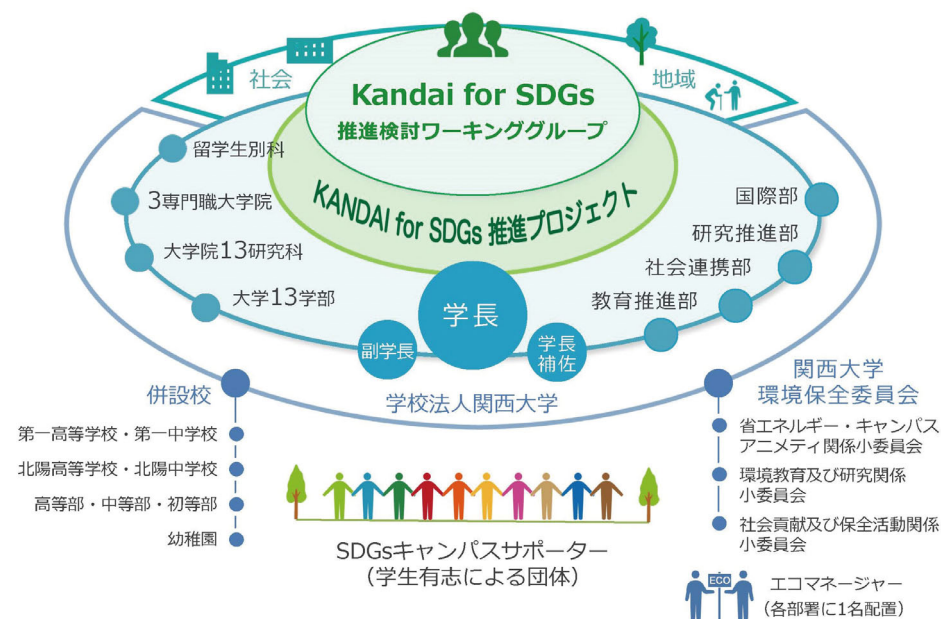
国際連合は、2015年9月に「われわれの世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」を発表しました。そこには、「誰一人置き去りにしない」(No one will be left behind)社会を目指すという共通の理念が提示され、その実現に向け、SDGs(持続可能な開発目標)が策定されました。この理念の下、すべての国とすべてのステークホルダーが、国際社会のパートナーとして、お互いの持てる力を出し合いながら、SDGsに取り組んでいます。国際社会のパートナーの一つである関西大学は、この理念にもとづいた研究・教育・社会貢献の展開、そして組織運営を通じての行動が求められています。

関西大学は、1922年以来、「学の実化」(学理と実際の調和)を大学の理念としてきました。学問と現実社会の調和を意味するこの言葉は、関西大学が教育・研究・社会貢献を三位一体として伝統的に考えてきたことを示しています。創立130周年を機に作成された関西大学の長期ビジョン(Kandai Vision 150)は、「多様性の時代を、関西大学はいかに生き抜き、先導すべきか」というテーマを掲げ、以下のような全体像を宣言しています。

自然と調和した、平和で希望に満ちた社会を探究し、それをめざした弛まぬ変革を支え、これらを実現する人材の育成に努めていく。多様な文化とその価値観を尊重し、柔軟かつ幅広い視野で物事を捉え、「考動力」と「革新力」をもって、新たな世界を切り拓こうとする、強い意思を有する人材を数多く輩出することで広く社会に寄与したい (Kandai Vision 150 全体の将来像 より)

国連の2030アジェンダは、人間、地球、豊かさ、平和、パートナーシップという5つのP(People, Planet, Prosperity, Peace, Partnership)をSDGsのキーワードとしています。関西大学は、自分ひとりのためでなく人類全体に思いをはせ、母なる地球を意識しながら、豊かさを追求できる「考動力」溢れる学生を育成します。一人ひとりが自由であり、世界のあらゆる人々、組織、国とつながって、社会をよりよくしていくことのできる「革新力」と、国際社会の協働的パートナーシップにより、平和を希求していく強い意志をもつ人材を社会に送り出します。

関西大学におけるSDGs推進体制



2. SDGs達成への取り組み

関西大学では、2018年12月、学長の下に「KANDAI for SDGs 推進プロジェクト」を設置し、教員、職員、学生がそれぞれの立場から連携・協働しながら、SDGs達成に向けて、多様な取り組みを展開している。以下はその一例である。

① 国連の取り組みへの積極的参画

2017年に国連アカデミックインパクトに参加し、18年には国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)および国連UNHCR協会と協定を締結。国際社会において平和の構築、社会の発展に寄与する人材の育成を目的に、パートナー大学としてUNHCR難民高等教育プログラム(RHEP)を導入。国際社会に対して難民支援の取り組みへの協力、多様な経歴を持つ学生の受け入れによる学内のダイバーシティの推進などの面からも同プログラムを推進・展開している。



② 多彩なプログラムで、世界の課題を身近に

国際部では学生の海外留学の支援だけでなくとどまらず、国際協力の理論や実例を学習する講義科目と現場で実践する「実習科目」を組み合わせ、国際協力サービスマーケティング(SL)プログラムを開講。国際協力に目を開くためのガイダンスやセミナーを開催している。また、国際協力に関心を持つ学生が集まりicvss (international cooperation volunteer student staff)を結成。マガジンの発行やフェアトレードに着目した学園祭出店など、学生間で国際協力への関心を広げるための活動を展開している。



③ 職員・教員・学生が三者協働するSD研修



2019年10月～12月にかけて、「関西大学×SDGs～持続可能な開発目標のために関大としてできること～」をテーマに、教育推進部教育開発支援センターが、職員、教員及び学生を対象にした全4日間のSD (Staff Development) 研修を実施した。この研修は、三者がそれぞれの立場から、持続可能な世界を実現するための大学のあり方を議論する、PBL (Project-Based Learning) 型ワークショップ。2030年のSDGsの達成に向け、関西大学ができる取り組みについて、協働でアクションプランを作成し、最終日にポスターセッションやアセスメントセッションで発表した。



④ 研究・技術シーズを、SDGsと関連付けて情報提供



社会連携部産学連携センター・知財センターでは、日々の研究活動を通じて得られた成果や保有する知的財産を、広く社会の課題解決や活性化に生かすために、冊子「研究・技術シーズ集」を作成している。関西大学の研究シーズがSDGsのどの目標に関連するものかを明示し、企業、地域社会とのマッチングを進め、SDGsへの理解と普及・活用を促進している。



⑤ 環境保全への取り組み・グリーンボンドへの投資

学園全体で自然エネルギーによる発電システム、ガスコージェネレーションシステム、地下水・雨水の利用、断熱ガラスやLED化などの環境保全活動を実施している。社会的な使命を持つ学校法人として、広く社会に還元される「ソーシャル・リターン(社会収益)」の向上を追求し、2018年度から、使途を環境に配慮した事業に限定して発行されるグリーンボンドへの投資も実施している。



⑥ 総合図書館で教員推薦図書进行展示

総合図書館では、SDGsの達成と読書啓発を目的に、その特性を生かしてさまざまな取り組みを展開する「KU Library thinks SDGs」の一つとして企画展を開催。Kandai for SDGs推進プロジェクトによる教員推薦図書を中心に、図書を通じてSDGsに対する認知度の向上と理解の促進に取り組んでいる。さらに学内にとどまらず、図書館総合展や紀伊國屋書店の各店舗でも巡回展示を実施している。



■リーダーズ・ナウ [在学生インタビュー]



ターニングポイントは 2年次のインカレ

チームに貢献することで自身も成長する

◎法学部 4年次生
黒川 圭介 さん

2020年シーズンからサッカーJ1・ガンバ大阪への入団が内定した体育会サッカー部の黒川圭介さん。日本サッカー協会より特別指定選手に認定され、今季は大学とJリーグ両方の公式戦に出場している。「自分の経験をしっかりサッカー部に還元したいと思っています」。目標はサッカー日本代表に入ること。

「これまでやってきた結果がプロにつながって安心しました」。数々のプロリーグからオファーを受け、来季からガンバ大阪への入団が内定した黒川さん。3年次生でプロ入りを決断した理由を聞くと「早い時期からハイレベルな環境に身を置けるということにとても魅力を感じました。今から壁にぶち当たったり、課題を見つかったりできるのは大きいです」と目を輝かせた。

黒川さんの持ち味は、抜群のスピード感と俊敏性を生かしたドリブル突破。90分走り続ける持久力にも定評がある。「後ろからしっかり攻撃を支え、スピードに乗ったプレーでチャンスを演出する。そのパワーには自信があります」。サイドバックとしての揺るぎない自信をのぞかせる一方で、細かな課題とも真摯に向き合う。「ロングパスの精度を上げたり、アシストの回数を増やしたり、質を上げることを常に意識して練習に取り組んでいます」。

LEADERS NOW!

サッカーを始めたのは幼稚園の時。両親がサッカーファンだったため、とても身近なスポーツだった。小学生のころに初めてスタジアムでプロサッカーの試合を観戦。プロ選手のかっこよさに引かれ「プロになる!」と心に決めた。以来、黒川さんは、中学校でも高校でも「自分のプレーさえ良ければ、プロへの道は開ける」と信じて鍛錬を続けた。「今思えば、周りには関係なく、自分のことだけになっていました」。考えが一変したのは、大学2年次のインカレだった。順天堂大学とベスト4進出を懸けた試合。延長戦に突入し、PK戦の末に競り勝った。「先輩たちが次々にPKを決め、チームを引っ張っていく姿に感動しました。チームで勝つ喜びを知り、「チームのために」という思いが芽生えました」。チームのためにプレーすることが、結果的に自分の成長につながる——。考えが変わったという。試合や練習でもメンバー一人一人に声を掛け、気付いたことやアドバイス等を伝えるようにもなった。「意識の高い集団なので、直接話すことで更にプレーが良くなると思うんです」。

元々、サッカー部のメンバーの絆は強い。黒川さんはスポーツ・フロンティア入試で進学した法学部生。「法学部は勉強が難しいと聞いていたので、最初は、大丈夫か!？」と(笑)。でも、試験前にはサッカー部の皆で勉強会を開き、毎回協力しながら乗り越えました。助け合う環境があったから大学での学修もおそろかにならず、そのおかげで今はサッカーに専念できる。本当にありがたいです」。4月に迎えたプロデビュー戦も、サッカー部のメンバーが揃ってスタジアムへ応援に駆けつけた。「観客の多さやスタジアムの迫力等、大学の試合とは全く違う魅力を体感しました。でも、何よりも印象に残っているのは、ピッチからスタンドにいるサッカー部のメンバー皆の顔が見えたこと。それが一番うれしかったです」。

現在の目標は、サッカー部の目標である『全員サッカーで日本一』を実現すること。自分がプロの世界で経験したことをサッカー部に還元したいという思いもある。一方で、東京オリンピック出場を視野にとらえ、自分磨きも続けていく。「東京オリンピック世代の日本代表にはまだ呼ばれたことがないので、そこに割って入りたいという気持ちが強い。そのためにレベルアップしたいです」。黒川さんの今後の活躍から目が離せない。



黒川 圭介——くろかわ けいすけ
■1997年、兵庫県神戸市生まれ。大阪桐蔭高等学校卒業。体育会サッカー部所属。DF。左サイドバック。2020年シーズンからサッカーJ1・ガンバ大阪への入団内定。日本サッカー協会より「2019年JFA・Jリーグ特別指定選手」に認定され、大学とJリーグ両方の公式戦に出場している。

地域の子どもたちと発掘調査体験

「老松場古墳群」1号墳の形状を立証する

◎文学部 2年次生
中村 真里絵 さん

関西大学考古学研究室は、2017年より長野県の伊那市教育委員会と共に老松場古墳群の調査研究を進めてきた。3年目となる今年は、1号墳が前方後円墳であることを立証するための発掘調査をメインに実施。8月24、31日には、中村さん、松岡さんら同研究室1、2年次生が主導で、小学生対象の発掘体験教室も開催した。

高松塚古墳壁画再現展示室
(関西大学千里山キャンパス)で撮影

長野県伊那市の段丘上に位置し、全7基の古墳から成る老松場古墳群。その1号墳は双円墳と考えられていたが、2015年に東春近小学校の6年生が測量したところ、前方後円墳であるという可能性が出てきた。これを受け、関西大学考古学研究室は伊那市教育委員会と協力しながら、毎年夏休みを利用して3カ年計画で調査を実施。今年は1号墳の前方部と後円部をつなぐびれ部を中心に発掘し、関連イベントとして小学生を対象に発掘体験教室も開催した。「実際にその土地の人や土、遺物、空気に触れ、自分は古墳にいるんだ!とワクワクしました。私たちにあって、古墳と言えれば決して遊びにくい所ではないけれど、老松場古墳群にはブランコなどの遊具もいっぱいあって、地域の人たちに愛されているんです」と、初参加の松岡さん。昨年に引き続き参加した中村さんは「老松場古墳群は古墳公園として整備されていて、地元の小学生にもなじみのある場所。子どもたちにもぜひ発掘調査を体験してもらいたいと企画しました」と、準備した子ども向けの資料を見せてくれた。「難しい言葉が多いので、ふりがなを振ったり、分かりやすい表現を考えたりと工夫しました。まだ改善の余地はあるけれど、それを考えるのも楽しいです」。



▲発掘体験教室で子どもたちと測量をする中村さん(写真中央)
▼現地説明会での松岡さん(写真右)



中村 真里絵——なかむら まりえ

■1999年、大阪府大阪市生まれ。関西大学高等部卒。関西大学考古学研究室の先輩たちの下で、古代寺院を研究中。趣味はJ-POPなどの音楽鑑賞。

◎文学部 1年次生
松岡 清乃 さん

これまでの活動で、1号墳の形状や葺石を調査し、7号墳までの測量図を作成してきた。調査は来年も実施。中村さんが「8号墳が存在する可能性も出てきているので、それも確認したい」と語ると、松岡さんも「7号墳の円墳は帆立貝形かもしれないという意見もあるので調べてみたい」と新たな調査を希望している。

また、考古学研究室は他にも学生の企画でさまざまな教育普及活動に取り組んでいる。夏休みに関西大学博物館で開催される「キッズミュージアム」では、考古学や飛鳥時代にまつわるネタを盛り込んだ「飛鳥考古楽かるた」や子どもが楽しめるオリジナルの紙芝居も制作・実演した。「紙芝居の時は、ふたりで白虎と青竜のパペットを使ってしゃべりました。四神の着ぐるみを着たこともあるんですよ(笑)」と松岡さん。また、日本学術振興会と共催の「ひらめき★ときめきサイエンス」では、土器にシリコンを流し込んで型を取り、昆虫や植物の痕跡を子どもたちと一緒に観察した。

歴史が好きで考古学の世界に飛び込んだふたり。考古学の魅力は「遺構や遺物を通して歴史を感じたり、地域の特徴を発見したりできること」と中村さん。松岡さんは「活動することでさまざまな人と出会い、多様な価値観や意見に触れられるのがすごく楽しい」と言う。「古墳の調査や遺物の実測、写真撮影などの技術は考古学研究室だからこそ得られるもの。今後は、それらを身に付けながら、卒業論文に向けて古代寺院の専門知識も増やしていきたい」と中村さん。「私もそろそろ研究内容を決めたい。古墳について深めていければ——」と松岡さんも前を向く。今後、ふたりがどのような研究を展開するのか楽しみだ。

松岡 清乃——まつおか きよの

■2000年、大阪府寝屋川市生まれ。枚方高等学校卒。関西大学考古学研究室にて、考古学の基礎となる歴史や発掘法などを勉強中。趣味は散歩。



▲考古学研究室オリジナル紙芝居



飛鳥考古楽かるた

地球に優しい 電気モータを研究開発

持続可能なクルマ社会を目指して

◎日産自動車株式会社 総合研究所 EVシステム研究所 主任研究員
加藤 崇 さん ー工学部1997年卒業ー



エネルギーや地球温暖化の問題、渋滞、交通事故——日産自動車は自動車を取り巻く課題に挑み続けている。加藤さんはEV車(電気自動車)やハイブリット車のモータ、インバータなど、パワーエレクトロニクス系の研究開発に携わり、省エネに貢献できる可変特性モータを開発。優れたモータ技術を表彰する「第五回永守賞大賞」を今夏受賞するなど、国内外の注目を集めている。

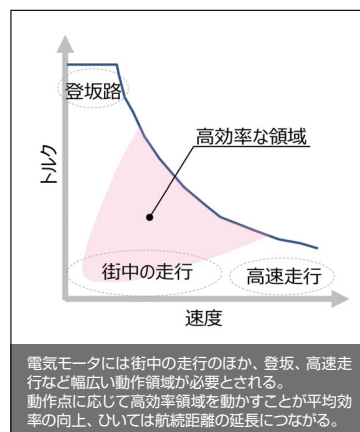


LEADERS NOW!



▲新型日産デイズ ハイウェイスターX プロパイロットエディション(2WD)

永久磁石を制御する独創的な技術を開発



近年、世界各地で気候変動が問題になっている。その主たる原因は温室効果ガス排出量の増加に伴う地球温暖化と考えられ、排出量抑制のために、さらなる技術開発が求められている。日本の基幹産業の一つである自動車産業においても、CO₂排出量の削減や低燃費化などの早急な対策が必要とされている。「現在、欧米を中心にEV車へのシフトが加速しています。ガソリンエンジンよりも電気モータの方が、同じ距離を走るときに排出するCO₂が少ないからです。また、電気モータの方がガソリンエンジンよりも少ないエネルギー損失で走行することができます」。そう語るのは、日産自動車総合研究所でパワーエレクトロニクス系の研究開発に従事する主任研究員の加藤崇さん。

「それでも少量のエネルギー損失があるため、モータの熱効率のさらなる改善を目指しています。エネルギー損失をゼロにはできませんが、可能な限り減らしたい」。そのために取り組んできたのが、モータに使用される「永久磁石」の磁力を制御する「可変技術」の研究だ。

永久磁石とは外部からエネルギーの供給を受けずに安定した磁場を発生させ、保持する磁石。非常に強力な磁石であるため、これまでその磁力を実際に制御するのは困難とされていた。しかし加藤さんの研究グループは、モータの高効率化が可能となる、磁力の可変技術を開発。「ガソリンエンジン車に搭載されるような変速機がなくても、負荷と回転数などに応じて最適な磁力に制御することで、エネルギー損失が大幅に低減します」。

大きな影響力を持つ技術の研究開発に面白み

この技術を搭載した可変特性モータとして、磁力そのものを変化させる「磁力制御型」と、低コスト化に有利な「漏れ磁束制御型」が提案されている。磁力制御型は、磁力の制御を材料から設計・制御まで体系的に考えたハイエンドタイプ。漏れ磁束制御型は、従来の永久磁石の材料や制御手法を使用したもので、車以外の家電などにも適用できる。この「永久磁石を活用した高効率な車両駆動モータの研究と成果」は、第五回永守賞大賞を受賞するなど高く評価された。

この可変特性モータの研究における苦労は「多様な領域の技術が必要だったこと」。そのため加藤さんは、パワーエレクトロニクスの研究が盛んなアメリカのウィスコンシン大学に2年間滞在し、共同研究を行ったこともある。

「基礎研究の成果は、企業戦略もあって必ずしも社会的に実装されたり、商品化されたりするわけではないのですが、形になったときには、社会に非常に大きな効果をもたらすことができます。夢がありますね。今後もパラダイムシフトにつながるような取り組みをしていきたい」。

自由な時間がある学生時代に勉強を

「子供の頃から工作や機械が好きで、将来は機械の分野に進もうと思っていました。大学では、高校までと違って好きな工学系の授業を集中して選択できるので、勉強がどんどん楽しくなりました」。卒業研究はディーゼルエンジンの振動計測法。「研究で壁にぶつかったときには、よく指導教員であった白木万博先生の執務室にお邪魔しました。穏やかで優しい白木先生に研究の進め方

などを褒めていただいたときは、うれしかったですね」と充実した学生生活を振り返った。

講義や実験に追われながらも、同級生と4人でバンドを組んで音楽活動も。パートはギター。学園祭でライブ演奏をしたこともあるという。「今はギターも部屋の飾りになっています。帰宅後は子供の世話をしたり、海外の最新情報を調べたりしているうちに、すぐに時間が過ぎてしまいます」。

リクルーターリーダーとして、今でも関西大学で学ぶ後輩に接する加藤さんは「社会人になると、本当に自分のための時間がありません。自由な時間がたくさんある学生時代に勉強し、好きなことを見つけてほしい。興味のあることに関する勉強は苦にならないですよ。私は今でも自宅で勉強しています。技術はどんどん進化するので、常に学び続けないと」と熱く語った。

一人の研究者として、そして主任研究員として大切にしているのは「人がしていないことに取り組みたい。新しいことを始めるときも、それが従来のものとどう違うのかを強く意識します」。凝り性だと自己分析しながら「一度始めるとやめられない。だからいつも忙しいのかもしれない」と楽しそうに笑った。

加藤 崇——かとう たかし

■1975年、大阪市生まれ。97年関西大学工学部機械システム工学科卒。同年日産自動車株式会社に入社。車両開発の業務に約5年従事し、2001年11月にEV車の主要技術である車両駆動用モータの研究開発に取り組むため、総合研究所EVシステム研究所に異動。15年芝浦工業大学大学院博士(後期)課程修了。

新型日産スカイライン
GT HYBRID Type SP (2WD)



■研究最前線

日伯合弁製鉄所の「技術移転」成功の鍵を探る

日本とブラジルの文化を 共存・調和させた「日系社員」

日本とブラジルのポンチ（懸け橋）となった人々

●商学部
長谷川 伸 准教授

世界で最も多く日系人が居住する国・ブラジル。日本とブラジルの経済的、文化的なつながりは、現在に至るまで極めて緊密である。本学でラテンアメリカ経済を研究する長谷川伸准教授は、ブラジル鉄鋼業界への技術移転、特にブラジルに渡った日本人移民とその子孫が日本からの技術移転でどのような役割を担ったかをテーマに、多くの日系人から聞き取り調査を行い、研究を進めている。

長谷川准教授の
研究論文の数々▶



内容が明らかにできつつあります。現在は、技術指導の仲介、現場でのモデルの内容を明らかにすべく研究を進めています。

異なる文化の間に立ち、困難な状況の中でとりくんだ人々について考えることは、「人から人への技術移転」にとって本質的な部分です。戦前、日本からアメリカ合衆国や南米、「満州」などへの移民の多くは地方出身者であり、当時の国家の移民政策によって海を渡りました。グローバル化が急速に進む現代の日本に暮らす私たちにとっても、学ぶことは多いはずです。

■未来は学生・子どもたちのもの

——その他にとりくんでいることはありますか？

地球規模の持続可能な開発目標「SDGs」への理解を深めるために、「2030 SDGsカードゲーム」を活用した授業をしています。このゲームは、自分の人生の目標と持続可能な社会をつくることを共に達成するには何が必要かを理解できるようになっています。学生たちが「自分が少しぐらい何かしても、世界は変わらない」ではなく、「自分が少し動くと、世界も少し変わる」と感じてほしいですね。

また、関大生と海外の大学の学生とがチームを組み、社会的課題の解決にとりくむ「国際ジョイントPBLプログラム」eJIPでは、メキシコ、ベトナムの学生たちと陸前高田市に行き、地元の人が気づいていない地域の魅力を発見する活動を行なっています。また「幸せの国」ブータンにおいても同様の「ブータンにおける持続的コミュニティ創生国際共修プログラム」MSBI@BTを行なっています。学生たちが自分とは大きく異なる相手と一緒に、価値ある仕事をするとは、彼らにとって成長の機会になりますし、これからますます社会に求められることになるでしょう。

——学生たちに伝えたいことは？

私は、学生たちには「ありのままでいいんだよ」とよく言います。でも、彼らは「ありのまま」でいることは難しいと感じていますね。自分の目ではなく他人からの目で自分を見てしまっているからでしょう。もっと自分の五感、感情を信じて大切にしてほしい。そういう私自身も「ありのまま」でいることを練習中ですが、学生が私の姿を見て「楽しそうだな。自分の好きなことをやってみようかな」と感じてくれたらうれしいなあ。

▼「2030 SDGsカードゲーム」を活用した授業



「2030 SDGsカードゲーム」で学ぶ



▼「国際ジョイントPBLプログラム」eJIP



ベトナム、陸前高田市で地域と異文化を学ぶ



■途上国の鉄鋼業の発展と技術移転を追う

——1950～60年代の日本からブラジルへの鉄鋼生産技術の移転に着目されていますね。

1958年に日伯合弁で設立し、1962年に操業を開始したミナスジェライス製鉄所（ウジミナス）は日本からの技術移転の成功例となり、国際技術協力のシンボルとなった企業でした。

私は、ウジミナスでの技術移転がなぜ成功したのかに興味を持ちました。日本とブラジルの間には言葉の壁があり、互いに相手の言語に通じているわけもなく、かつ、英語でのやりとりが可能なのはエンジニアなどのごく一部に限られていました。文化の壁も厚く、労働観や人生観なども大きく異なっていました。こうした壁をウジミナスがいかに乗り越えて成功したのか。その秘密を解く鍵が、操業開始期に400～500人規模で大量に採用された日本人移民（一世）、二世の存在とその役割にあるのではないかと考えたのです。

ウジミナス操業開始記念の灰皿を手に。溶鉱炉の火入れの際にできた鉄塊でできている



■研究を通じて記憶を次世代につなぐ

——どうやって研究を進めたのですか？

ウジミナスの社史や関係者の回顧録では、日系社員は通訳者・翻訳者、指導の仲介役、現場でのモデルといった役割を果たしたとされているものの、役割をどのように果たしたのかは明らかではありませんでした。

ウジミナスはなぜ日系移民を必要としたのか。なぜ日系移民やその子孫が大量に入社したのか。入社した彼らはどのような役割を果たし、どのような苦労があったのか。私は、こうしたことが語られることなく、記録されることなくブラジルの大地に埋もれていくことが看過できませんでした。

——そこで、当時ウジミナスで働いていた元日系社員に聞き取りをするようになったのですね。

そうです。1950年末～60年初めに入社した人たちは、現在80～90歳代です。中にはすでに亡くなった方やお話が難しい方もいらっしゃる。時間との勝負ですので、可能な限り聞き取りを進めたいと思っています。

——聞き取り調査を通じて、どんなことが明らかになりましたか？

日系社員は、通訳としての待遇も教育も受けることなく通訳をせざるを得ませんでした。にもかかわらず、日系社員は日本とブラジルの文化の間に立ち、両者を共存・調和させる「文化の仲介者」としての役割を果たしたことがわかりました。元日系社員の方が言っていた「ウジミナスでポンチ（懸け橋）の役割を果たした」



今も、陸前高田市での活動の際に購入したバッグ（ベンチ上・右端）を愛用している

水素エネルギー社会の実現に向けて

水素貯蔵材料の開発

扱いやすく、大量に、安全に貯蔵・輸送

●化学生命工学部
近藤 亮太 准教授

Materials for Hydrogen Energy Society

水素を次世代のエネルギーとして活用しようとする動きが活発になっている。関西大学学部生のころから金属材料の研究に取り組んだ化学生命工学部の近藤亮太准教授は今、水素の利活用に欠かせない、水素の運搬・貯蔵の効率性を高める材料の研究・開発に取り組んでいる。その研究成果は、水素社会の実現に向けた我が国の歩みを、一歩前に進めるものになるかもしれない。

■水素貯蔵材料って何？ 金属材料の優位性

——水素社会の実現に欠かせない材料について、研究をされているとお聞きしています。

CO₂を排出しない水素エネルギーは、地球温暖化対策の切り札と期待され、日本でも国レベルで技術開発戦略を打ち出し、水素社会の実現に向けた動きを積極的に推し進めています。2014年12月に商用水素ステーションが開設され、トヨタが水素を燃料とする燃料電池自動車「MIRAI」を発売した翌15年は、水素元年と称されました。

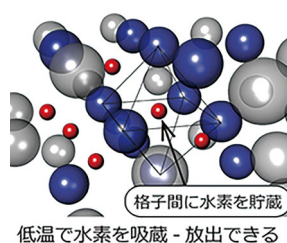
現在、水素ステーションの水素は700気圧以上の高压でタンクに貯蔵されています。燃料電池自動車が、東京から大阪までノンストップで走るためには、5キログラムの水素が必要ですが、それは約3分で充填できます。短時間で充填できて、長距離走行が可能なのが、電気自動車にない水素燃料電池自動車の特長です。ただ、水素は圧力を高くすると温度が上がり、短時間のうちに出入れすると、タンク内の温度が乱高下を繰り返すため、タンクを損傷する危険性が出てきます。今は、この危険を解消するために、事前に水素を冷やして充填するシステムが取り入れられているのですが、今後はより安全で効率良く、コンパクトで軽く、大量に水素を貯蔵・輸送する技術が必要です。そこで、研究が進められてきたのが水素貯蔵材料を用いたシステムです。私はこの水素貯蔵材料の開発を研究してきました。

——水素貯蔵材料というのは、具体的にはどのようなものですか？

いろいろな水素貯蔵材料があるのですが、私が研究しているのは基本的にマグネシウム系、もしくはチタン系を中心にした金属系の水素貯蔵材料です。金属が水素と反応して水素化物をつくる反応を利用して、水素を貯蔵します。

通常、水素はH₂という分子で存在しますが、金属中に入ってくると、Hという原子に分かれる。そのHが、金属結晶の格子の隙間に収まるというイメージで理解してもらえばいいと思います。

●金属系水素貯蔵材料



▲器具を作るための加工装置

——気体ではなく、固体の化合物にして蓄えるわけですね。そのメリットは何ですか？

H₂同士だと分子と分子の間の反発作用があって、近付ける距離が決まっているので、どんなに圧縮しても圧縮しきれない領域というが出てきてしまう。だけど、水素原子に分けると反発作用を抑えて、大量に貯め込むことができます。体積でいうと、気体の状態と比較して700分の1から1000分の1ぐらいまでコンパクトにできます。

■水素貯蔵材料としての課題に独自のアプローチ

——マグネシウムやチタンの水素貯蔵材料は、実用に近付いているのですか？

マグネシウムは資源的に豊富で安価なため、枯渇するリスクが少ない。チタンも比較的安価です。実用化を視野に入れて、最初から研究してきました。中でも、マグネシウム系をどうにか実用化しようと、いろいろなプロジェクトを進めています。

ただ、いろいろ課題もあります。マグネシウムは、水素とイオン結合して水素をどんどん貯め込んでいくのですが、マグネシウムの表面でだけしか反応せず、水素がマグネシウムの中に入っていく結合することがないと考えられてきました。その課題に対して、マグネシウムを細かい粉末にして表面を増やすことで、水素をたくさん貯め込むようにするというのが、世界各国の研究者たちが今までやってきたことでした。しかし、私たちは別のアプローチをしています。

——どのようなアプローチで解決しようとしているのですか？

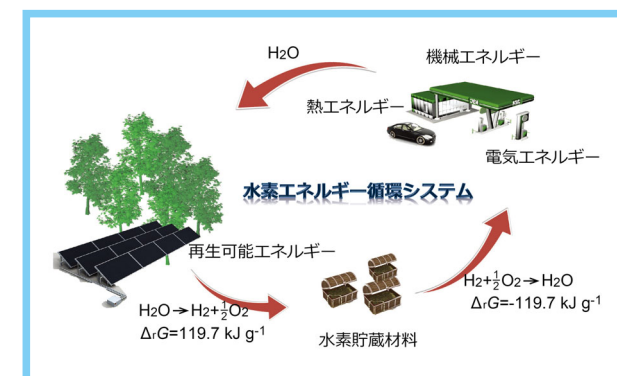
まず、なぜ水素が内部へと拡散していかないかを解析しました。すると、水素は表面で止まるばかりではなく、実は内部に入り込んで水素化物を生成することがあることに気がきました。これは世界でも私たちが発見した現象だと思います。

その現象とは、マグネシウムは材料中に欠陥があると、そこを起点にして、水素との結合がどんどん進んでいくこと、また、水素の拡散速度が変わる箇所があることが分かってきました。このメカニズムが明らかにできれば、生成起点、例えば故意にひずみなどの欠陥を作ることによって、マグネシウムを微粉末化しなくても材料として使えるという予想がついてきました。

マグネシウムは微粉末化してしまうと、酸化しやすくなり、危険物に該当するなど取り扱いに注意が必要です。また、熱伝導性が悪くなります。水素は熱を加えて取り出すので、固体の方が熱効率が良く、ハンドリングもしやすい。その点でも、なるべく大きな形状のままで、水素を貯蔵できる材料開発が必要とされているわけです。

——チタン系の水素貯蔵材料にはどのような性質があるのですか？

チタン系の水素貯蔵材料には、室温で水素を取り出せるものもあります。しかし、高純度の水素でないと、すぐに表面が酸化物に覆われて、貯蔵できなくなってしまうというデメリットがあります。マグネシウム系から出てくる水素は、純水素しかないので、マグネシウム系でコンパクトに大量に貯めて、そこから取り出した水素をチタン系に移すようにすれば、室温で取り扱うことのできるコンパクトなシステムが作れます。例えば、ビルの屋上に太



陽光パネルを設置して、その電力で製造した水素をこのシステムで貯蔵・利用すれば、そのビル全体のエネルギーを賄うことができると思います。

■クリーンなエネルギー社会の実現に貢献したい

——研究では実用化を常に意識しているのですか？

やっぱり私たちは工学系の学部にいるので、社会のためになるようなものを作らなければいけないと思っています。国は、2040年までに水素貯蔵材料を使ったシステムを、実用化させるという目標を立てています。国際的には既にエネルギー供給の30%以上が再エネ由来になっている国が多数あり、日本は出遅れています。このエネルギー分野に、何らかの形で役に立つものを作っていきたい。次世代にきちんとバトンを渡せるように、クリーンなエネルギー社会を作っていくことは、世界共通の課題だと思っています。——研究者として、今後の抱負を。

まだ世界にはない独自の研究をしていきたい。研究者人生を歩めるのは、おおよそ30年から40年。その中で、新しいものを見つけ育てるためには少なくとも10年は必要とするので、結局一生の間に多くて4つぐらいしか新しいものを形にできない。だから、なるべく若いうちは新しいもの、誰もやっていない観点の実験を進めて、それを育てていきたいと思っています。

Topics ■トピックス [学内情報]

◎ 関西大学×大阪体育大学による合同シンポジウム
「大学スポーツとオリンピック・パラリンピックの精神」を開催

五輪の哲人・大島鎌吉の哲学に迫り、 スポーツの意義を問う

11月30日、関西大学と大阪体育大学は「五輪の哲人」と称される大島鎌吉氏が残した足跡を振り返りつつ、大学スポーツやスポーツの意義を考えるシンポジウム「大学スポーツとオリンピック・パラリンピックの精神」を千里山キャンパスにて開催した。

大島氏は関西大学在学中の1932年ロサンゼルスオリンピック陸上三段跳びで銅メダルを獲得。卒業後は毎日新聞社に入社し、戦時中は堪能なドイツ語力でベルリン特派員として活躍した。戦後は運動部記者の傍ら、後進の育成に尽力。64年の東京オリンピックでは日本選手団団長、選手強化対策本部長の重責を担い、大阪体育大学の創立などにも携わった。スポーツ思想をあらゆる媒体で表現し、「跳ぶ哲学者」とも称された大島氏。スポーツやオリンピックを通しての世界平和を提唱し、アジア初となる「オリンピック平和賞」を受賞するなど数々の業績を残している。

第1部の講演では、一般社団法人大学スポーツ協会(UNIVAS)専務理事の池田敦司氏が「大学スポーツの展望とUNIVASの役割」をテーマに、大学ス

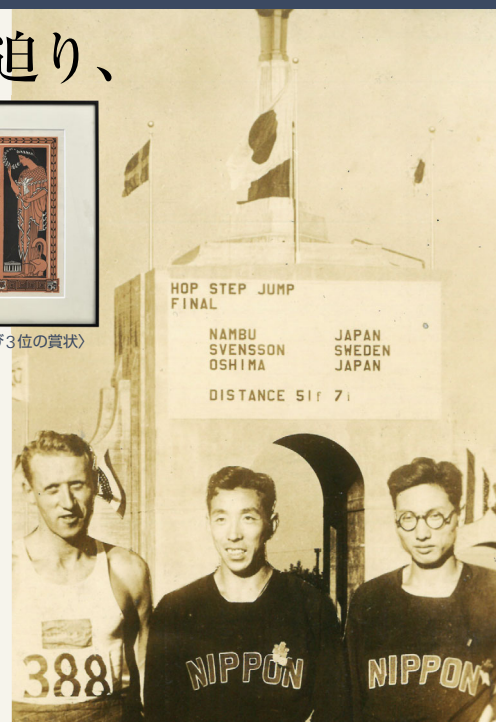


▲〈第1部〉池田敦司氏による講演
▼〈第2部〉学生アスリートによる対談

ポーツの可能性について言及。第2部の両大学の学生アスリートによる対談「大学生アスリートにとっての勉強とスポーツ」では、文武両道のための工夫や苦勞、競技から学んだことなどについて語った。第3部のパネルディスカッションでは、野球の赤星憲広氏、アーティストイックスミシングの巽樹理氏、陸上競技の和田伸也氏ら3名のオリンピック・パラリンピック出場経験者が登壇し、それぞれの競技への思いやオリンピック・パラリンピックの精神の中で重要だと考えることなどについて活発な議論を展開した。



〈ロサンゼルス五輪 三段跳び3位の賞状〉



▲1932年のロサンゼルス五輪 三段跳び金銀銅メダリスト(右:大島氏)



〈第3部〉パネルディスカッション

同時開催 2019年度 関西大学 年史資料展示室 企画展「スポーツの人 五輪の哲人 大島鎌吉」

〈オリンピック功労賞〉



賞状



首飾り



ラベルピン

東京オリンピック・パラリンピックを来年に控えた今、大島氏が取り組んだオリンピズム(五輪精神)に根ざした青少年教育や平和活動の軌跡を改めて振り返り、スポーツと平和について考える企画展を開催している。

【期 間】: 2019年10月1日～2020年3月14日
【場 所】: 関西大学千里山キャンパス
簡文館(博物館)1階 年史資料展示室
【開館時間】: 10:00～16:00
【休館日】: 日曜・祝日・大学が定めた休日(詳細はお問い合わせください)
【入場料】: 無料

◎ SDGsへアプローチする5つの企画「KU Library thinks SDGs」

図書館を通じたSDGs認知度アップ大作戦！



今秋より、関西大学図書館とKANDAI for SDGs推進プロジェクトが連携し、国連が掲げる持続可能な開発目標(SDGs)の達成を支援する5つの企画「KU Library thinks SDGs」を実施している。

その一つとして、9月21日～2020年1月30日まで、企画展「わたしたちは世界を変えられる」を同図書館にて開催。SDGs達成のヒントとなる推薦図書を表示している。そのほかの企画として、10月21日～11月3日には紀伊國屋書店天王寺ミオ店でも同様の推薦図書やパネル展示及び学生によるトークイベント、経済学部・良永康平教授ゼミの学生によるプラスチックごみ削減への提案などを実施。さらに、国連広報センターによる資料ガイダンスを織り交ぜた講演会や、国連大学サステナビリティ研究所、地球環境パートナーシッププラザ、上智大学の協力によるパネル展示、地球温暖化防止に向けた取り組み「すいたクールアースウィーク」とのコラボレーションブース設置など、SDGsの認知度アップを狙うおのこのアプローチを展開した。

◎ 第42回関西大学統一学園祭を開催

あなたとつなぐ「LINK with U」



Kandai Dance Festival

2019年度の関西大学統一学園祭が、11月1日から4日まで、千里山キャンパスで開催された。今年のテーマは「LINK with U～つなげ関大愛～」。

令和最初の統一学園祭には、昨年の10万人を上回る約11万人が来場。サークルやゼミ等による200以上の模擬店やフリーマーケットをはじめ、研究発表やステージ企画、講演会等、さまざまなイベントや催しでにぎわいを見せたほか、1日にはインシュタインや祇園、さや香らがお笑いライブを披露。2日にはKANABOONによるライブイベント、4日には玉木宏さんによるトークショーも開催され、連日、学内は熱気に包まれた。さらに、統一企画構成委員会が運営する毎年恒例の目玉企画「関大お笑い王決定戦2019」「Kandai Dance Festival」「K.U.ROCK FEVER 17th」も行われ、観客も巻き込みながら圧巻のパフォーマンスが繰り広げられた。また、最終日の夕方には、悠久の庭で後夜祭が開催され、約2,000人が結集して感動のフィナーレを迎えた。



Food booth



◎J:COMと社会連携番組を共同制作

学生による「関大生の明るいニュース」の配信開始



関西大学とJ:COM(株式会社ジェイコムウエスト)は、番組を通して地域との関わりを深め、地元地域を盛り上げることを目的に、社会連携番組の共同制作を開始した。この取り組みは、まず、学生たちがグループ単位で設定したテーマに基づいて取材・撮影をし、ナレーションやテロップを加えて5分程度の映像を制作。その映像はJ:COMチャンネル(地上デジタル11ch)の番組「デイリーニュース 北摂」内の「関大生の明るいニュース」コーナーで放送される。番組には実際に映像を制作した学生が出演し、キャスターからの質問に答えたり、感想を伝えたりする。番組は北摂エリアの48万3千世帯に生放送されるほか、地域情報アプリ「ど・ろーかる」や本学ウェブサイトでも視聴することができる。

第1回目の10月31日には体育会重量挙げ部をテーマに、第2回目の11月27日には兵庫県猪名川町の獅子舞をテーマにした映像を放送。学生たちは緊張しながらも、番組制作の一端に触れる貴重な経験ができた。以降、月に1回程度の配信を目指して活動を続けていく予定である。



▲▼「関大生の明るいニュース」収録の様子



◎関西大学協賛の「大阪マラソン2019」開催

関大生ボランティア、今年も約600人が大活躍



12月1日、今年で9回目となる「大阪マラソン2019」(大阪府・大阪市・一般財団法人大阪陸上競技協会主催)が開催された。「みんなでかける虹。」をスローガンに、応募で選出された約33,000人のランナーが、大阪府庁前をスタート。京セラドーム、天王寺など大阪の名所を通過し、大阪城公園をゴールとする新コースを駆け抜けた。沿道には130万人もの人々が詰め掛け、ランナー一人一人に熱いエールを送った。

関西大学は第1回目からオフィシャルスポンサーとして大会運営に協力し、地元「大阪」を盛り上げるためにさまざまな形で参画してきた。今大会も、ランナーをはじめ、給水ボランティア、チャリティ募金ボランティア、語学対応ボランティアなど、多くの学生と教職員が参加。沿道の「ランナー盛上げ隊!」では、応

援団、JAZZ研究会、ダブルダッチサークル「Mix Package」、漢舞、フラダンスサークル「coco girl」、ベリーダンスサークル「BELLY DIVAS」、カイザーズクラブキッズチアなどが楽しい応援パフォーマンスを繰り広げ、大会に彩りを添えた。

また、11月29日、30日にはインテックス大阪で「大阪マラソン EXPO 2019」が開催され、「産学連携による研究力」をテーマに関西大学ブースを出展。人間健康学部の河端隆志教授と小田伸午教授のゼミが「ランニングフォームクリニック」を開催し、人間の構造的特徴に基づいた理想的な走行フォームなどについて解説・指導。さらには、河端ゼミが株式会社京伸とともに共同研究しているトレーニングルーム「K-MAX」の展示・体験会も併催した。

◎「まちFUNまつりin関西大学2019」を開催

大学とママ&キッズがつながるキャンパスイベント



12月8日、地域と大学をつなぐイベント「まちFUNまつりin 関西大学2019」が、NPO法人関西大学カイザーズクラブ、NPO法人ママふぁん関西、ミズノ株式会社の協力のもと、千里山キャンパスにて開催された。

「地域に開かれた大学」を目指し、今年で5回目を迎えた本イベント。当日は、サッカーや野球などのスポーツ体験をはじめ、サイエンスショーやママたちの特技を生かしたワークショップ、ミズノ流忍者学校、子ども店長企画、うちカフェペーパードリッパ体験など、バラエティ豊かな催しが展開され、会場は熱気に包まれた。

また新企画として、本学発の地域交流拠点である丹波市「佐治スタジオ」による農産物の直売会や、駄菓子アイドル『da-gashi ☆』のステージパフォーマンス、オリオン株式会社などの在阪製菓メーカーの協力による駄菓子配布なども実施。来場者は総勢7,000人にも及び、笑顔溢れる一日となった。



▲ミズノ流忍者学校

◎社会学部の池内裕美研究室が3種類のグルメメニューを開発

野菜の摂取量アップ！ 「大阪ええモン 関大Vグルメ」が誕生

社会学部の池内裕美研究室と大阪府、大阪タカシマヤは、産学官連携で3種の野菜グルメメニューを開発した。同商品は、11月13日～26日まで、大阪タカシマヤ地階食料品売場の各店舗にて、オリジナル商品「大阪ええモン 関大Vグルメ」として発売された。

「大阪ええモン」は、大阪の知られざる魅力を発掘して紹介する大阪タカシマヤの名物企画。池内研究室は消費者心理の知識をビジネス現場に生かすことを研究テーマとしており、全国ワーストクラスである大阪府民の野菜摂取量を増やすため、府からアイデアを求められて開発に着手した。

発売されたメニューは、ダイヤ製パン「パストラミボークと5種の野菜サンド」、かなたに「秋のええとこ彩り弁当」、道頓堀今井「イペリコ豚と野菜の旨味たっぷりうどん鍋」の3品。それぞれの商品のネーミングには「野菜をおいしく食べていただけるVegetableグルメで、健康づくりのVictoryを



◆ダイヤ製パン「パストラミボークと5種の野菜サンド」



◆かなたに「秋のええとこ彩り弁当」



◆道頓堀今井「イペリコ豚と野菜の旨味たっぷりうどん鍋」

目指してほしい」という思いが込められた。期間中は、商品開発を手掛けた学生らが店頭立ち、自ら販売をサポート。連日、売り切れが続くなど、好評を博した。

体育会野球部が秋季リーグ戦で優勝 明治神宮野球大会でも健闘の準優勝！



8月31日から開催された2019年度関西学生野球連盟秋季リーグ戦において、体育会野球部が4季ぶり37回目の優勝を果たした。さらに優勝の感動がさめない10月28日には、南港中央野球場にて開催された第50回記念明治神宮野球大会関西地区代表決定戦(第17回大阪市長杯争奪関西地区大学野球選手権大会)に挑み、天理大学に勝利して2年ぶり7回目の明治神宮野球大会出場を決めた。

そして迎えた11月15日からの第50回記念明治神宮野球大会。47年ぶりに決勝に勝ち進んだ野球部は、慶應義塾大学と対戦した。スタンドには、本学関係者や卒業生らが駆け

付けたのみならず、千里山キャンパスでもパブリックビューイングを実施。関大生が一丸となってエールを送ったが、惜しくも日本一には及ばなかった。

試合後、主将の松島さん(人4)は、「1戦1戦大事に野球をしようという思いでやってきて、ここまで来られたのは本当に幸せ。大学野球最後の打席、自分なりのスイングができた。応援も間違いなく日本一。スタンドを見て泣きそうになった」と、ここまで応援してくれた応援団や観客に感謝の意を述べた。「全国制覇」まであと一歩に迫った経験とたどり着けなかった悔しさは、次代にしっかりと受け継がれた。

リオ・オリンピック レスリング57キロ級の銀メダリスト、 樋口黎さんがレスリング部の練習を指導



11月14日から4日間、樋口黎さんが体育会レスリング部の練習指導に訪れた。

樋口さんは大阪出身で、国民体育大会では府の代表として活躍。本学レスリング部OBとの交流もあったため、このたびの指導が実現した。

初日にはテレビ番組の取材もあり、部員たちは少し緊張した面持ちで練習に臨んだが、すぐに練習に集中。連日、メダリストから助言や指導を受けるという貴重な経験を通して、個々の競技能力の研さんに励んだ。

村野藤吾建物の選定記念シンポジウムを開催

千里山キャンパスに現存する村野藤吾建物が、一般社団法人DOCOMOMO Japanによる2018年度「日本におけるモダン・ムーブメントの建築」に選定されたことを受け、12月7日、記念シンポジウムが千里山キャンパスで開催された。当日は、村野氏が設計したKUシンフォニーホールにて、選定プレート贈呈式及び記念講演が行われ、約200人の聴講者は熱心に聞き入っていた。また、村野建築をイメージしたダンスパフォーマンスや建物見学ツアーも実施された。

村野藤吾氏は近代日本を代表する建築家の一人であり、1940年代後半から約30年にわたって千里山キャンパスの簡文館や岩崎記念館、円神館、誠之館など40棟以上の建造物を設計。現在の千里山キャンパスのデザインに大きな影響を与えた。



簡文館の中のらせん階段